

思い出すままに

堀 美佐子

(昭和49年修士修了)

冬の柔らかな陽射しが射し込むとある大学の一室、柳川先生との出会いはそこで始まった。緊張に身を固くしながら、先生の言葉を一つも聞き漏らすまいと全身を耳にしていたが、先生の口から出てくる言葉は殆ど初めて聞くことばかり。温厚なお人柄に少し安堵しながらも、学問の厳しさをひしひしと感じさせられた一時であった。

主として文献を拠所としながら宗教現象を解明していくことに関心を持っていた私にとり、先生のゼミは、異質の、しかしそれだけに新鮮で刺激のあるものだった。先生のお陰で、宗教学的調査というものを僅かばかり経験できたことは有難いことだったと思う。大学院に入学した年の夏に行った会津田島でお祭の調査は、本当に皆目判らぬまま先輩の後についてうろうろ歩き回ったばかりであったが、生まれて初めて本格的な祭らしい祭を見、濁酒なるものを飲み、身欠き鍊を味わい、と一駒一駒を今でも鮮明に思い出せる楽しい体験だった。祭の好きでなかった私が、祭に抵抗感を持たなくなったのは、偏に祭好きの柳川先生の薫育の賜物といえるだろう。その後、北海道常呂町での調査にも三回参加させて頂いた。今度は、田島の時とはやや違って調査の意味を擱んだ上での参加で、少しは主体的に動けたように思うが、人の話を聞くのが苦手な私にとり、相当しんどい仕事であった。しかし、新しい未開の地での伝道について熱っぽく語るキリスト者や、昔の記憶を手繰りながら訥々と話して下さる純朴な方々と接することができたことは、私の視野を広げるのに随分役立ったように思う。常呂では、流水の寄せ来る三月に調査が行われたので雪による苦労も多かったが、寮での共同生活は快適で、当番を決めての食事作りも、冬の乏しい材料の中で工夫した当番それぞれの味が出て、なかなか美味しかった。先生はちっともやかましいことを言われず、美味

しように召上って下さったので有難く思ったものだった。先生は誰に対しても分け隔てなく接され、穏やかなためか、先生が質問するとその相手の方は、私達が問うてもなかなか出てこないような返答をすらすらと出され、話が色々な方向へ発展するので、いつも感心させられた。調査のベテランとはこういうものかと思いつく考えさせられたものである。文献ばかり漁っている私に、先生が“少し調査もした方がよい”と助言して下さったことがある。それに触発されて、調査とは程遠いものだったが、研究テーマにしていた真宗の蓮如の活動地域を歩き回り、御講にも参加した。民衆の中で息づいている真宗信仰にじかに触れたことは、その後文献を解読する上でも大きな力となったように思う。

大学の教室での先生はやはり恐い存在だった。こちらの不勉強ということがあるにせよ、びしびしと問題点を衝いた鋭い質問を浴びせられるのだ。学問上では決して甘えを許さぬ不寛容な父という印象である。ところが、一步大学を離れ、例えば、研究室の旅行やコンパの席となると、先生の顔貌は慈父の趣に一変する。とりわけ女性に優しく、一杯機嫌の先生が、大勢の前で歌うのを躊躇していた私に助け舟を出して下さり、一緒になんと“赤胴鈴之助”の歌を歌って下さったこともある。同様に印象深かったことは、コンパが終ると必ず先生が女性の帰り路を心配して下さって、エスコート役の男性を割り振られることだった。大学の先生が女子学生に特別そのような配慮をされるということは驚きだった。遅いのを承知で残っていた私には、夜更けに方角が同じとはいえわざわざ足を伸ばして下さったりする殿方に申し訳なく思ったものだ。そしてまた、相当いい気分であらっしゃる先生がそのようなことに頭を使って下さることに恐縮するのが常だった。

こうして、先生と共に過ごした時間を反芻してみると、細々とした出来事が際限なく思い出されてくるようである。もう御退官の年を迎えられるのかと思うと本当に感慨深いものがある。先生には、私の気付かぬところでも随分色々と気を遣っ

て頂いたような気がする。改めてこの場をお借りして篤く御礼申し上げたい。そして、これからも、鋭い舌鋒で後進の徒を叱咤激励する存在であり続けられることを切にお祈りしたい。